

【調査報告】

台湾における産後ケア事情： 出産情報と産後ケア養生についてインタビュー予備調査

The situations of postpartum care in Taiwan: Pilot study on the contemporary postpartum resting and delivery in Taiwan

金城 壽子, 小西 清美, 川満多枝子, 鶴巻 陽子, 長嶺絵里子, 鬼澤 宏美

要旨

目的：

台湾産後ケア視察から得た産後ケア施設情報をもとに、台湾産後ケア活用状況（出産情報と産後ケア・養生の実状）を調査することで、産後ケアについて示唆を得る。

調査方法：

台湾国籍、台湾で出産し、宿泊型の産後ケア（護理之家、月子中心）、自宅で産後養生をした褥婦の親3名に対し、質問紙による構成的インタビュー調査を実施した。

倫理的配慮：

対象家族の知人であるインタビュワーの説明のあと、国際電話による調査に応じることで同意を得たとした。インタビュワーが台湾へ一時帰国する際、書面による同意を得た。

調査結果：

対象は出産年齢が33～35歳、分娩様式は帝王切開であった。入院期間は5～6日で、分娩費用は医療保険の適応（一部負担20%）があり、産後ケアの費用は全額自費である。台湾では妊婦健診を受けた病院で出産し、退院後は産後ケア施設を利用することがわかった。

利用日数は10～30日であった。産後ケア施設が予約できないケースは、産後養生食としての月子食宅配が利用されていた。

考察：

対象は、出産年齢が高く、施設分娩の入院日数が米国に近い傾向にある。台湾における産後ケアの背景として、産後一カ月は育児以外何もしない産後養生の思想「坐月子」が継承され、また、核家族化により褥婦のレスパイトケアが必然であり、育児や家事の負担を支援する宿泊型の産後ケアは自費であっても需要が高い。また、産後養生の特徴である月子食は医食同源の概念（薬膳）が取り入れられ、宿泊できない場合、宅配利用で家事軽減を図っていた。

キーワード：産後養生、坐月子、護理之家：産後ケアセンター、月子中心：産後養生センター、台湾、産後養生食

I. はじめに

台湾をはじめとするアジアの国々は産後の一定期間、心身の回復を図るための食事を取り入れ、ゆっくり養生する風習が古くからあり（松岡, 小濱, 2013）、台湾では1970年代、韓国は1996年代から（桜井ら：2009, 勝川ら：2008）、心身ともにリラックスできる産後ケア施設も充実していると報告されている。台湾では、古くから「坐月子 (Tso-Yueh-Tzu)」といって産後1ヵ月ほどゆっ

くりと身体を休ませ、特別な養生メニューを摂る習慣がみられる。この時期に無理をせず身体のケアをしっかりとっておけば、妊娠前にあった腰痛や冷え性、便秘等の体質も改善され、更年期を楽に過ごすことができると考えられている。台湾はそのためのケア施設やサポートシステムも充実しているといわれている（曾, 2015）。

今回の調査は、アジアにおける産後ケアの先進国ともいえる台湾の施設を視察し、沖縄における産後ケア事業

の展開を探る手がかりの一つとして、出産情報と産後ケア養生についてインタビューによる予備調査をすることにした。視察した産後ケア施設の3施設の概要は別稿で述べている。

台湾の産後ケア施設には、看護師の在・不在により、2種類の産後ケア施設がある(台湾衛生福利部, 2015)。産後養生のしかたには、「坐月子」の習俗がみられ、産後ケア施設は「月子中心」(看護師不在)と、産後ケアセンターと呼ばれている「護理之家(看護師24時間対応, 主に小児科, 産婦人科医師の配置は施設により違いがある)」に分けられる。

台湾における出産は、施設分娩が殆どであり、経陰分娩後2～3日、あるいは帝王切開5～6日間の産褥入院のあと、自宅には戻らず、産後ケアの施設入院システムがある。施設で分娩をされた70～80%の母親が活用されている状況を知った。高橋(1998)による研究ノートで紹介されている台湾の「全国健康保険」の一部負担では、「出産は10%」とあるが、視察時の説明では、分娩入院費用は分娩様式に関わらず「20%」で医療とみなされていた。一方、産後ケア入所の場合は100%自費である。一日NT \$800(円換算で4倍すると¥3,200/日)食費が追加される市立病院があり、食費を含む公立と私立の施設を見学した。坐月子の習慣、特に中国伝統料理・調理をとり入れた食事療養は印象深いものがみられた。

台湾の施設訪問では視察時間、質問の制約などがあり、利用者の意見を知ることができなかった。今回、台湾視察で通訳を務めた張(成宮)景恵氏を通して、張氏の知人家族のご協力、ご理解が得られ、知人家族の出産、産後について、より個別な出産及び産後ケアについて調査できたので、出産・産後ケアの事情としてまとめ報告する。

II. 研究方法

目的：台湾産後ケア視察から得た産後ケア施設情報をもとに、台湾産後ケア活用事情(出産情報と産後ケア・養生の実状)を調査した。また、沖縄県地域医療再生における課題の一つとして「地域における切れ目のない妊娠・出産支援の強化地域」における産後ケアのありかたについて示唆を得る。

期間：2015年10月(予備調査)

対象：研究対象は、台湾国籍、台湾で出産し、産後ケア施設を活用、あるいは、自宅で産後養生された褥婦3名の親。

方法及び実施場所：質問紙による構成的インタビュー調査。

インタビュー項目は褥婦の属性、出産した産科病院、産後ケアの場(施設、自宅)。調査用紙は日本語で作成し(表1-1)、インタビューが現

地語に翻訳し、現地語で実施(表1-2)。実施場所は沖縄県、国際電話によるインタビュー調査であるため、対象となる褥婦の不在をさけ、負担を考え、対象の親を通して間接的にインタビューガイド(表2)調査をすすめた。

倫理的配慮：実施場所は沖縄県、国際電話によるインタビュー調査であるため、対象となる褥婦の不在をさけ、また、負担を考え、対象の親を通して間接的に調査をすすめた。

対象者には、研究目的、研究方法、研究への協力・参加は自由意志であり、研究の協力・参加に対し、同意がなくても不利益は受けないこと、インタビューに応じることで同意したものとすること、本研究への協力を拒否、辞退しても不利益は受けないこと、答えにくい質問に回答しなくてもよく、不利益は受けないことについて口頭で説明することをインタビュー者をお願いした。さらに、インタビュー者が台湾へ一時帰国する際、対象とその親から書面による同意を得た。連絡に使われた個人情報やインタビュー以外知らないこと、構成的インタビュー内容はインタビュー者が翻訳したものを用い、全過程において対象者のプライバシーの保護、匿名性の確保に努め、特定されないよう十分に配慮した。

III. 調査結果

対象の属性と出産情報について表3に示した。対象3名の家族形態は核家族であり、2名は職業ありと回答していた。対象の年齢と初経については、35歳が2名(初産と2回経産婦)、34歳の初産が1名であった。出産時期は2015年の出産が2名、2013年の出産が1名となった。分娩様式は3名とも帝王切開をうけていた。帝王切開の理由は、「無理をさせない、眼圧が高い」などであった。出産場所は3名とも公立病院で、入院期間は5～6日間であった。施設の選択理由は「有名だから(知名度)」「知り合いの紹介」「家が近い」ことであった。

出産施設は妊婦健診をうけた施設での分娩の場合、病院の予約は必要ないということであった。入院費用は母親の場合、6,000元～13,000元となり、児は2,000～4,000元であった。母児別室が2名、希望で母児同室が1名みられた。C10のケースは帝王切開をうけたが、母児ともに経陰分娩と同額である情報が得られた。

C20のケースは、不妊治療で有名な医師を訪ねて治療後妊娠。最初の妊娠は流産だった。自然分娩を希望したが貴重児だったため、無理をせず帝王切開となった背景がみられた。

表1-1. インタビュー内容（日本語）

台湾での産科事情についてのインタビュー調査

対象氏名 _____ 年齢 歳 初産・経産(番目)

インタビュー受け _____ 対象との関係 (_____)

出産 (自然分娩・帝王切開) 出産日 _____ 年 _____ 月 _____ 日

結婚年齢 _____ 歳 職業 _____

家族構成 (_____)

インタビュー時期 2015年 10月 **インタビュアー** 張(成宮)景恵

1. 産科病院について

施設名		経営母体	公立・私立
その施設を選択した理由	家から近い・実家から近い・対象の職場から近い・夫の職場から近い 有名な施設だから・知り合いの紹介・その他(_____)		
入院期間	日間	母児同室	同室・別室
入院費用	母親	入院の予約をした時期	
	ベビー		

2. 産後ケア施設について

施設の種類	産後護理之家・月子中心	経営母体	公立・私立
	月子食（食事の宅配）		
その施設を選択した理由	家から近い・実家から近い・対象の職場から近い・夫の職場から近い 有名な施設だから・知り合いの紹介・その他(上の子の面倒をみるため自宅で)		
入所期間	日間	母児同室	同室・別室
産後ケア施設を利用する理由			
入所費用		入所の予約をした時期	
産後ケア施設を利用した感想			

表2. インタビューガイド

- ① 共同研究者 K が出産後のケア情報について必ず質問してほしい内容をあらかじめ質問紙にして通訳兼翻訳ができるインタビュワー（張氏）へ渡した。
- ② 張氏が台湾の現地語（中国語）でインタビューを受ける対象の母及び義母へ、国際電話をして聞き取る。
- ③ 国際電話によるインタビュー調査であるため、対象の不在をさげ、対象の親を通して間接的に調査をすすめた。口頭による調査協力への同意を得てインタビューした。また、張氏が一時帰国の際、書面による同意を得る。
- ④ 聞き取った内容は、表の項目に○で囲むか、簡単な単語で書き込むようにした。
- ⑤ 張氏が聞き取った内容やメモをもらい、研究者 K がまとめた。

張氏は台湾出身で、日本の産婦人科の勤務経験があることから、現地語だけでなく専門用語も理解しているのでインタビュワーとして適切であると判断した。さらに、共同研究者と職場が近いことから、研究調査内容の相談・調整など距離的・時間的観点からもよい。

メモの原本保存、中国語調査用紙も作成。

インタビュー調査内容（表1-1 日本語 表1-2 中国語）

研究協力への依頼と同意書

表3. 対象の属性と出産情報

対 象	C10	C20	C32
年齢（歳）	35	34	35
職業の有無	主婦	有（公務員）	有（経理）
家族形態	核家族	核家族	核家族
初／経産の別	初産	初産	2回経産
分娩様式 （特記）	帝王切開 （子宮外妊娠、不妊治療後の 妊娠、自然分娩予定）	帝王切開 （流産、不妊治療後妊娠、自然分娩希 望していたが貴重児、無理しない）	帝王切開 （眼圧が高い、母親の負担軽減）
出産時期	2013年3月	2015年9月	2015年7月
結婚年齢	26	30	28
出産場所	公立	公立	公立
入院日数	6	5	5
入院費用（母／児）	6,000/2,000	13,000/4,000	13,000/4,000
施設の利用理由	家が近い、有名な医師	知り合いの紹介	有名だから
情報提供者	義母	義母	実母

費用単位は元、調査年：2015年10月

出産費用は支払った金額（20%）であること、母親の場合、6,000元～13,000元となり、児は一律2,000元から4,000元でなっていた。一日入院日数で換算すると2,600元（日本円換算は約4倍）。

次に、産後ケア施設について調査した内容を産後ケア事情として表4に示した。

対象2名の初産婦は、半年前から公立の産後ケアセンター、あるいは私立で産後養生センターの予約をとられていた。「施設を選択した理由」は「産科病院を選択する理由」と一致しており、「地名度、知り合い、家が近いこと」であった。産後ケア施設を利用する理由のひとつ

つが「（公立は）安価である」と関連していた。母児のケアと食費込で公立は30日で11万元であった。一日あたりで換算すると、公立は3,700元、私立では6,800元となっていた。利用する理由は、「マンツーマンケア、スタッフの評判がよい」ことであった。

2回経産婦は手続きをしたにも関わらず満室で入所できないという状況がみられた。また、1回目の出産では産後ケアセンターを活用していることがわかり、今回の出産は在宅ですごし、「産後養生食の宅配」を3食利用し、その費用は一日1,700～1,800元でなっていた。

産後ケア施設「産後護理之家（公立）」で提供される

表4. 産後ケア施設についてインタビュー結果

対 象	C10	C20	C32
施設の種類	産後護理之家 (公立)	月子中心 (私立)	自宅 (月子食宅配)
施設選択理由	家から近い 有名な施設だから	知り合いの紹介	予約できなかった
入所期間 (日)	30	10	30
産後ケア施設を 利用する理由	安価, マンツーマンでケ アしてくれる	スタッフが良いと評判が いい	産後ケア施設に入所するつもりで予約し たが, 満室で入れなかった 上の子を面倒みるために, <u>今回は</u> 自宅へ 産後養生食の宅配を依頼した
母児同室	別室	別室	自宅なので同室
入所費用	110,000元/30日	6,800元/日×10日	1,700～1,800元/日 (3食)
入所の予約をし た時期	出産予定日の半年前から	出産予定日の半年前から	(予約手続きしたが満室)
産後ケア施設を 利用した感想	とても良かった	とても良かった	

食事については、今回、台湾視察した公立病院で提供される食事を参考にした（資料3）。私立の月子中心、産後養生食の宅配メニューについては次回の報告とした。

IV. 考察

今回インタビューされた対象の属性の特徴として核家族、結婚時期26～30歳となり、出産年齢が33～35歳と高いことがわかった。分娩様式に関わらず出産費用は医療保険が適応され、分娩様式は母体の負担への配慮や貴重児であるため帝王切開が選択されていることがわかった。また、初婚が2名、職業婦人が2名みられた。東アジアのなかでも、台湾、韓国、日本は合計特殊出生率が超低出生率の国である（伊藤，2013）。

宮本（2011）は台湾の子育て施策の中で人口指標として合計特殊出生率（TFR）が低いこと、人口施策として低年齢保育対策をのべている。台湾（人口約2,300万人）と香港（人口約700万人）のTFRが特に低い背景には、中国一人っ子政策、女性の就業能力の高さと晩婚化、さらに核家族化が要因とされている。また、台湾では経済の高度成長、家族形態も従来の大家族から核家族となり、限られた数の子どもしか出産しないこと、かつ出産後に女性の養生を助けるはずの姑が近くにいない場合もあり、近年では赤ん坊を姑に預けたくないという女性たちもいると述べている。

曾（2015）や桜井ら（2006）によると、1970年代から産後養生が自宅から産後ケアセンターなどの施設への変遷がみられる報告がある。実際、今回の視察した2施設の病院の説明では、施設分娩のあと、付属の産後ケア施設を利用すること80%であるといわれている。インタ

ビューしたケースのひとは経営主体が公立の産後護理之家（産後ケアセンター）が利用されていた。経営主体が私立で「月子中心」の産後養生センターも満室の状態であり、一日6,000元（日本円暗算換算で4倍すると¥24,000）自費でも需要もあることがわかった。

施設を選ぶ理由として知名度があり、地名度に関連する内容として評判（ケアのありかたと人材）や費用が重視されていた。日本の場合、沖縄において医療費は30%負担があり、出産負担一時金（42万）の費用負担制度がある。けれども、首都圏と違い、沖縄では“ユイマール”と称する沖縄の風土、家族の絆や地域共同体がみられる。家族のサポートが得られやすい環境にあり、産後養生ケアの出費がある自費となると需要は下がることが推測される。

日本の首都圏以外の産後ケア情報では、保谷氏（2015）が経営する私立助産院「ほや助産院」があり、開設当初より、出産後、あるいは他の施設分娩で子育て、おっぱい相談で困っている褥婦へ産褥入院サービスを提供している。また、長野市から委託を受ける前から、自費¥12,420の入院料金ではじめ、平成17年から委託を受けるようになってから個人の負担額は殆ど変わらない程度で現在もサービスが継続されている。一方、公的な半額補助がある産後サービスが受けたくても受けられない潜在的ニーズ・相談、利用者が多いことを感じていると述べている（保谷，2015）。

今回3名から得られた調査結果では産後ケア施設の入所予約が半年前から行われても入所できない褥婦1名がおり、視察情報でも希望者80%あり、希望したけれども入所できない褥婦もいることがわかった。

妊娠・出産から母体の回復、体力には安静休養と食事

が重要である。公立の産後ケアセンターで提供されている食事内容(表5)をみると、台湾では産後養生食の概念が一般に普及していると伺われる。献立は日本と共通して6大栄養素がバランス良く摂取されることの他に、医食同源の概念を取り入れた薬膳スープや薬膳食が特徴としてみられた。その他に家族が購入したもの、施設外からの漢方食材の持ち込みが可能である。台湾では面会の機会を利用して、体力回復、子宮復古(退行現象)や新陳代謝を促す薬膳を取り入れた食事の支援が施設だけでなく家族の双方から支援が得られていると思われる。同時に、施設の食生活の指導として産後6ヵ月間は新陳代謝がいいので、ダイエットのゴールドタイムであると動機づけられた興味深い内容がみられた。一方、授乳期間是不適切で無理なダイエット(減量)はしないことなど留意点が産後の回復に影響する保健指導には重要である。

入所できない褥婦は、在宅で産後養生食の宅配を注文することで家事負担を軽減できることから、入所でも、在宅でも台湾の産後ケア養生のあり方に豊かさを感じさせられた。

台湾では、産後ケアセンターが予約できないケースは、月子食宅配、つまり自宅へ産後養生食の宅配を依頼していたことがわかった。その背景には、台湾では産後養生として郷土料理が伝統料理、薬膳であり、一般家庭に普及している(光瀬, 2014)。

台湾視察の短期間で私たちが食した中華料理にみられた汁物は薬膳スープであると説明された。張氏やその母親の世代は日常でも食材を調達し薬膳調理ができるということだった。台湾の食文化は朝市、夜市で食する外食文化である印象をうける。台湾視察の期間、外食をして感じたことは食材が豊富、調理法が独特である。張氏が

表5. 産後護理之家(産後ケアセンター)の食事概要 【 】の漢字は翻訳前

食事概要	内 容
産後の献立 【産後調理食】	栄養士により6大栄養素を取り入れたバランスのよい食事の献立にする。医食同源の概念を取り入れた薬膳スープや薬膳食で産後の母親の血の巡りや筋肉疲労の回復を図る。また、産前にあった慢性的症状の改善を図る五臓のバランスを整え、血めぐりを抑止、母乳分泌促進、美容効果、体力増進のための食事を提供する。
産後食の原則 【産後飲食原則】	1. 油濃くない、湿性・平性の食材を中心にする。 2. 新鮮な季節の食材 3. バランスのとれた食事、母乳分泌を促す食材 4. 火を通した食事 5. 迷信に惑わされない 6. 濃いお茶やたばこ、酒の禁止 7. 授乳している人は高タンパク質で水分の多い食事にする(+500Kcal増)
メニューの原則 【飲食設計原則】	新生署(日本の厚生労働省にあたる)の提唱 ・毎日2,400~2,800Kcal ・乳製品: 1~2割 ・肉, 魚, 豆類: 7~8割 ・五穀, 根菜類: 3~7杯 ・野菜: 3~4割 ・果物: 3~4割 ・油: 3~4匙
産後調理の薬膳 【坐月子: 産後調理薬膳】	原則として血の巡りをよくする, 子宮を温める, 悪露の排泄を促す漢方, タンパク質を煮込んだ物: 施設外で買ってきた漢方を一緒に煮込んで可 生化湯(子宮収縮を促すスープ, 漢方薬湯): 5~7日間飲む。子宮収縮剤を処方される場合は勧めない, 医師の指示に従う。 杜仲粉(腰のだるさを緩和): 白湯と一緒に飲む, 肉類につけて食べる, 杜仲粉をスープに入れてのむ。
制限食材	冷たい食べ物は禁止, 例えば, アイス, ジュース, 梨, 柚子, グレープフルーツ, すいか, ココナッツ, みかん, トマト, 緑豆, レンコン, きゅうり, ゴーヤ, へちま, 冬瓜, 白菜, 大根, ナス, 豆腐, 昆布, 鴨, 蟹, マコモ, タケノコ, 柿, 桃 しかし, 調理方法によって食することができる。

訳した資料にみられるケアセンターの食事概要(表5)にも薬膳が郷土(中華)料理、伝統食の習俗として普及されて紹介されていた。例えば、“肉類では豚豆(腎臓)”, “産後食は湿性・平性の食材を中心に” することである。“湿性・平性”は医食同源の考え方がとりいれられた薬膳である。ちなみに、食物の食味食性について、5味(湿性、熱性、寒性、涼性、平性)・5性(甘・辛・酸・苦・鹹)に分けられている(仙道, 2009)。薬膳は産後養生食として、日常の食事にとりいれられるよう保健指導が行われている。

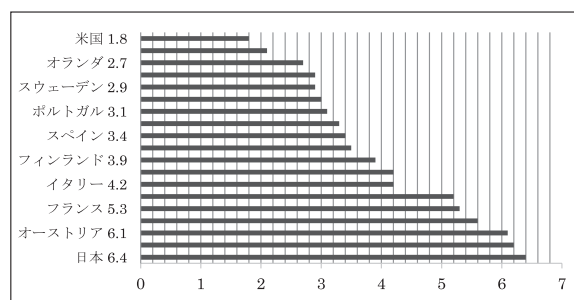


図1. 各国の産後医療入院日数
Postpartum length of stay from OECD data 2000

経膈分娩による入院日数が2日前後である台湾は米国に近い産後入院日数である(図1)。日本では医療費政策として入院短縮化が勧められている。一方、第55回日本母性衛生学会・学術集会ランチョンセミナー6(2014)では、諸外国では入院短縮化と同時に、母親役割獲得の概念をもとに宿泊型施設の産後ケアがとりいれられている情報が紹介された。OECD(経済協力開発機構)調査にみられた出産入院の短縮に伴う産後ケア体制として、日本と産後入院日数が近いオーストラリアでは、退院後の早期家庭訪問体制や産後ケアセンター施設などが必要である(伊藤, 2012)。坂梨ら(2014)は産後退院後に母親が望む支援形態の選好として“外来受診、助産師による訪問看護、産後ケア施設”の順であると報告されている。また、島田ら(2001)による報告から、産後うつ発症の要因となる育児不安が最も強い時期として産後退院してから2週間と報告されている。産後ケア体制ばかりでなく支援期間も重要と考える。

台湾における宿泊型産後ケアの背景として、産後養生の思想が継承され、高度経済成長、核家族化があり、褥婦一人で育児や家事を担うことからレスパイトケアを必然として、自費であっても需要が高いことがわかった。日本の少子化対策の一環として、「地域における切れ目ない妊娠・出産支援の強化」に伴い首都圏では産後ケア施設やそれに関連する事業が増加している。首都圏以外の地域の産後ケア施設は、レスパイトケアの担い手となる家族の減少、自費負担が課題となると思われる。

V. まとめ

インタビューの結果、対象は核家族で、出産年齢が33~35歳であった。分娩施設は公立病院で、分娩様式は帝王切開であった。入院期間は5~6日で、出産費用は母親で6,000~1,3000円、児は2,000~4,000円となっていた。

1. 日本同様出産年齢が高く、施設分娩は入院日数が日本より短縮されている。
2. 出産入院費用は医療保険の適応(20%の負担)があり、産後ケアの費用は全額自費である。
3. 台湾では妊婦健診と出産場所は同一とする施設分娩のあと、産後ケア施設を利用する。
4. 産後ケア施設は経営主体が公立(産後護理之家:産後ケアセンター)と、私立(月子中心:産後養生センター)がみられた。
5. 産後養生センターは、公立で価格がコントロールされている産後ケアセンターより高くても利用されている。利用日数は10~30日であった。
6. 産後ケアセンターが予約できないケースは、月子食宅配、つまり、自宅へ産後養生食の宅配を依頼し家事負担を軽減していることがわかった。

VI. おわりに

本研究は平成27年度から科研費補助金(挑戦的萌芽研究, 課題番号15K15865, 小西清美代表)の助成を受けて、台湾の産後ケア施設を視察した。

最後に、インタビュー調査に多大なご協力、ご理解をいただきました張(成宮)氏とその知人ご家族のご協力に深く感謝します。

引用参考文献

- 伊藤正一(2009), 特集:男女労働者の働き方が東アジアの低出生力に与えた影響に関する国際比較研究(その1)台湾の少子化のマクロ分析, 人口問題研究(J. of population problems) 68-3 (2012.9) pp.29-47, www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/19177401.pdf 2015.8
- 伊藤正一(2012), 特集:第16回厚生政策セミナー「東アジアの少子化の行方—要因と政策対応の共通性と異質性をさぐる—」, 台湾の少子化と政策対応, 人口問題研究(J. of population problems) 68-3(2012.9) pp.50-65, www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/19723704.pdf 閲覧2015年8月
- www.gifu-cn.ac.jp/information/10-01/1001_P051.pdf

- 勝川ゆみ, 大賀明子, 永井祥子他 (2008): 韓国の出産と産後ケアの現状—産後ケア施設誕生の背景と課題に関する研究—, 横浜看護学雑誌, Vol.1 No.1, pp. 1-9
- 坂梨薫, 勝川由美, 永井祥子, 他(2014)産後退院後の母親が望む支援—4か月未満の乳児を持つ母親の選好—, 関東学院看護学雑誌, 1(1), pp. 16-24
- 産後護理之家優於坐月子中心 (2015): 産後養生センターと産後ケアセンターの比較—坐月子機構比較—坐月子中心と産後ケアセンター—, 蘋果日報web版 (2015) <http://www.appledaily.com.tw>, 閲覧2015年8月
- <https://ma.mohw.gov.tw/masearchBAS-101-1.aspx> 閲覧, 2015年8月
- 桜井礼子, 高野政子, 林猪都子, 他: 韓国における産後ケアセンター事業の実態と日本における可能性, 草間朋子 (編), 子育て支援のための産後ケア調査研究事業研究成果報告書. 大分: 5-11, 2006.
- 島田三恵子, 渡部尚子, 神谷整子, 他 (2001). 産後1ヶ月間の母子の心配事と子育て支援のニーズに関する全国調査—初経産別, 職業の有無による検討—, 小児保健研究. 6(5), 671-679.
- 仙頭正二郎 監修 (2009): 「食物性味表 (YAKUZEN hand book seimi table) Ver. 2 燎原書店 p.90
- 曾 環蕙 (2015): 台湾における産後養生と女性の身体, 奈良女子大学者科学論集, 第22号, pp.73-89,
- 台北市政府衛生局 (2015): 護理員人法 (PDF 木當案), 閲覧, 2015年8月
- 「台北市立案産後護理之家一覽表」: <http://health.gov.taipei> 閲覧, 2015年10月
- 台湾衛生福利部 (2015): 産後護理機構評鑑結果 (102-103年度), PDF 木當案, 2013-2014年, 「産後護理機構評鑑結果名單」 台湾衛生福利部 <http://mohw.gov.tw> 閲覧, 2015年9月
- 高井順子, 曾根志穂, 大木秀一他 (2005): 韓国における地域で働く看護職の現状及び教育体制について, 石川看護雑誌Vol. 3(1), pp85-93
- 高橋隆 (1998): 台湾「全民健康保険」の制度紹介, 海外社会保障研究, No.125 winter, pp.102-111,
- 「内政統計通報」(2015): 中華民国内政部統計處 内政統計通報2015年第22週, 2015年5月30日 <http://www.moi.gov.tw>, 閲覧2015年8月
- 西村真実子, 吉田和江, 米田昌代他 (2009): 韓国の産後調理院の視察, 石川看護雑誌, Vol.6, pp.125-128
- パーリーナー, ウンスッカセーム (2010): 少子化対策における産後ケアと助産院の役割に関する分析, 一橋大学国際・公共政策大学院公共経済プログラム2年, www.ipp.hit-u.ac.jp/consultingproject/2010/CP10Parena.pdf 閲覧2015年11月
- 福島富士子, みついひろみ (2013): なぜ, 今産後ケアが求められるのか, 助産師雑誌, 67(10), 医学書院, pp.800-806
- 福島富士子, みついひろみ (2014): 産後ケアなぜ必要か 何ができるか, 岩波書店, pp 4-12, 53-61
- 保谷ハルエ (2015): お母さんの一番たいへんな時期を24時間サポートする—産後ケア (産褥入院) サービスを行う助産所—助産所ほやほや, N∞ (ナースアンフィニ) 2015年新春号, 日本看護連盟, pp.16-19
- 松岡悦子, 小濱正子編著 (2013): 世界の出産—儀礼から先端医療まで—, pp.24-33 (上海女性は帝王切開がお好き?), pp.282-292 (産後がなにより大事—韓国の産後調理院), 293-298 (産後の養生「坐月子」中国; 姚毅) 勉誠出版
- 光瀬紀子 (2014): 台湾一日周! 安旨食堂の旅, 双葉文庫
- 宮本義信 (2012): 台湾の子育て施策の新動向—低年齢児保育対策を中心に—, 同志社女子大学生活科学 Vol.46, pp.36-45
- 安井真奈美編 (2014): 出産の民俗学・文化人類学, 出産が unhappy な体験となるとき, 産後養生 pp.54-76 (松岡), 勉誠出版
- 山田皓子, 小山敦代, 矢野恵子他 (2012): 平成22年台湾研究報告, 明治国際医療大学誌, 6号, pp.63-72
- 吉田静, 佐藤香代, 鳥越香代他 (2015): 中国北京における妊婦の食生活と文化, 福岡県立大学看護学研究紀要Vol. 12, pp.25-35
- ランチョンセミナー6 「未来の産後ケアの在り方～千葉モデルを創造しよう～」配布資料, 演者6名(猪口邦子, 生水真紀夫, 石井邦子, 田村一代, 杉本雅樹), 第55回日本母性衛生学会総会・学術集会 (2014)

